

0. はじめに

他の「大作家」と同様、ルソーについてもすでに長年にわたって様々な角度から研究が進められているため、近年に固有の傾向を語ることは難しい。また、ルソーの著作の性質上、その研究領域は様々な分野に広がっているため、全体的な見通しを作ることなど（本音を言えば）自分の力量をはるかに超えた仕事である。この短いレビューで言及されるのは、あくまでも筆者が暫定的に設定した「近年の動向」であり、そこから漏れる幾多の貴重な仕事の価値を否定するものではない。また、拙稿でお名前を引用させていただく際には、記述の煩雑を避けるために敬称を省略させていただいた。以上の点についてあらかじめご理解いただければ幸いである。

1. 国内外の研究拠点・グループについて

はじめに、ルソー研究者の活動を支えている国内外のいくつかの研究組織に言及したい。フランスにある研究拠点の一つは、Tanguy L'Aminot によって長年主催されている CNRS の « Équipe Jean-Jacques Rousseau » であり、近年までパリ・ソルボンヌ大学にて定期的に研究会を行っていた。諸事情により現在は活動を休止している同研究会としばしば連携していたのが、モンモランシーにあるジャン=ジャック・ルソー博物館であり、1980 年代から学術雑誌 *Études Jean-Jacques Rousseau* を編集して、日本人研究者も口頭発表や論文投稿の機会を数多く与えられてきた。2011 年に 18 号をもって終了した *Études* を代替する媒体として、L'Aminot が 2013 年に新たな研究誌 *Rousseau Studies* の刊行を始めていることも特筆すべきであろう。タイトルが英語であることから推察されるように、フランス-スイス中心主義的な立場と距離をとり、フランス語圏以外の地域からも多数の研究者が寄稿している。

2012 年のルソー生誕 300 年を機会に、二つの新しい『ルソー全集』の刊行が始まったが、L'Aminot とその周辺に集まった研究者は Honoré Champion 社版『全集』の編集・校訂作業を中心に担っている。Champion 社の『全集』はテーマ別（著作のジャンルごと）に分巻されており、当初予定されていた通り 2012 年中に全巻が出版された¹。これに対して、他方の Classiques Garnier 社版『全集』は、時系列に沿って巻が進む構成になっており、当初の予定では 2016 年までに全て刊行されることになっていた。しかしながら 2015 年 6 月現在、実際に出版されているのは『孤独な散歩者の夢想』を収録した第 20 巻ただ一冊のみである²。2012 年以来、ソルボンヌ大学 CELLF (Centre d'étude de la langue et des littératures françaises) の Jacques Berchtold、Christophe Martin によって « Séminaire Jean-Jacques Rousseau » が主催されており、こちらは特にパ

¹ *Œuvres complètes*, sous la direction de R. Trousson et F. S. Eigeldinger, 24 vol., Paris (Genève), Champion (Slatkine), 2012.

² *Œuvres complètes*, tome XX (1776-1778. *Les Rêveries du promeneur solitaire*, cartes à jouer), éd. par A. Grosrichard et F. Jacob, Paris, Classiques Garnier, 2014.

リ大学に在籍する学生や、Garnier 社『全集』に携わるメンバーを発表者に迎えて、毎月の研究会を行っている。

さらに、Bruno Bernardi が 2000 年代から組織している «Groupe Jean-Jacques Rousseau» の活動も活発である。こちらは「哲学系」の研究者（来日したこともある主要なメンバーとしては André Charrak、Blaise Bachofen、Gabrielle Radica、Céline Spector、Ghislain Waterlot など）を主体に構成されており、今世紀に入ってからルソーの（周辺のかつ理論的）著作を新たに編集して Vrin 社から出版するとともに³、GF 版の注釈・編集にも携わっている。件の新『全集』に関しても、Bernardi の «Groupe» が参加しているのは Garnier 社版の方である。

スイス・ジュネーヴ大学も伝統的なルソー研究の牙城として、特に *Annales de la société Jean-Jacques Rousseau* と関係の深い研究者を抱えている。2012 年には Martin Rueff（同大教授、ジャン=ジャック・ルソー協会現会長）が「ルソーと愛」というテーマで多様なゲストと対談を行ったほか、Alain Grosrichard（同大名誉教授）や Michel Porret（同大教授）などの主催により「ジャン=ジャック・ルソーの友と敵」というテーマの 5 日間にわたる大規模なシンポジウムも開催された。また、ルソーと馴染み深いサヴォワ地方には、リヨン第 2 大学、リヨン高等師範学校、グルノーブル第 3 大学などの研究者で構成される研究組織 «LIRE» (*Littérature, idéologies, représentations XVIII^e siècle*) が存在し、Michael O'Dea、Jean-François Perrin、Yves Citton といったメンバーを抱えている⁴。

研究組織に関する話題と若干離れるが、2012 年に向けて徐々に整えられた研究環境として、各地に散在するルソーの草稿・手稿が電子化されてインターネット上で公開されたことを付記しておく⁵。これらの一次資料に対しても、二つの新しい『ルソー全集』が編集される過程で改めて関心が集まった⁶。また、ルソー生誕 300 年にはシンポジウムだけでなく、展覧会も各地で開催、その概要・成果報告は論文集⁷やカタログ⁸として出版されている。

³ J.-J. Rousseau, *Discours sur l'économie politique* : édition et commentaire, sous la dir. de B. Bernardi, Paris, Vrin, 2002 ; *Lettres écrites de la Montagne*, commentaire : la religion, la liberté, la justice, sous la dir. de B. Bernardi, F. Guénard et G. Silvestrini, Paris, Vrin, 2005 ; *Principes du droit de la guerre et Écrits sur la paix perpétuelle*, éd. par B. Bernardi et G. Silvestrini, commentaire sous la dir. de B. Bachofen et C. Spector, Vrin, 2008.

⁴ 2012 年には «LIRE» 主催の国際シンポジウムが行われ、その成果が最近出版されている : *Jean-Jacques Rousseau et l'exigence de l'authenticité : une question pour notre temps*, sous la dir. de J.-F. Perrin et Y. Citton, Paris, Classiques Garnier, 2014.

⁵ BnF のサイト Gallica から閲覧可能ではあるが、各々の所蔵機関がインターネット上で公開しているルソーの草稿として、国民議会のサイト (<http://www.assemblee-nationale.fr/histoire/7gf.asp#fonds>) とジュネーヴ図書館のサイト (http://www.ville-ge.ch/bge/bibliotheque_numerique/ms_rousseau.html) を挙げておく。さらにフライブルク大学のサイトからヌーシャテル大学図書館所蔵の『音楽辞典』と『夢想』の草稿を参照できる (<http://www.e-codices.unifr.ch/fr>)。また、トゥール大学のサイト BVH (Bibliothèques Virtuelles Humanistes)からはルソー所蔵のモンテーニュ『エッセー』（余白にルソー自身の書き込みがある）も参照可能である (<http://www.bvh.univ-tours.fr/Consult/index.asp?numfiche=766>)。

⁶ たとえば、Champion 社版『全集』で『ルソー、ジャン=ジャックを裁く—対話』の編集を担当した Philip Stewart の著作 *Éditer Rousseau : enjeux d'un corpus (1750-2012)*, Lyon, ENS éditions, 2012。また、Garnier 版『全集』の研究者たちと近い Nathalie Ferrand は『新エロイーズ』や『ダランベール氏への手紙』に関する生成研究を行っている。特にルソーに関する研究として以下の文献が挙げられる : «Jean-Jacques Rousseau : le dernier état retouché de la Lettre à d'Alembert sur les spectacles (1758)», in *Genesis : brouillon des Lumières* (n° 34), textes réunis et présentés par Nathalie Ferrand, Presses de l'université Paris-Sorbonne, 2012, pp. 135-157 ; «Brouillons d'Héloïse», *Revue de la BNF*, n° 42, 2012, pp. 71-79。さら

日本における研究グループも、ルソー生誕 300 年を境にして特に活発な活動を始めているため、2012 年のイベントを軸にして記述することにしたい。まず最初に挙げられるのは、三浦信孝と永見文雄が近年立ち上げた研究会「ルソーと近代」であろう。この研究会の成果は、2012 年に国際シンポジウム「ルソーと近代 ルソーの回帰・ルソーへの回帰」として結実している⁹。その活動は現在も継続され、狭義の「ルソイスト」はもちろん、その他の関連領域の研究者も広く集めることに成功している。また、2012 年の日本フランス語フランス文学会秋季大会（於 神戸大学）では、阿尾安泰がワークショップ「ルソーからの読解—18 世紀の語るもの」を主催している。2012 年末の同東北支部大会でも、阿尾は逸見龍生、熊本哲也とともにシンポジウム「ルソー、ディドロ、フランス 18 世紀 ルソーとディドロ生誕 300 年にあたって」を開催し、精力的な活動を見せた。他にも、慶應義塾大学で行われている月例の『百科全書』・啓蒙研究会（鷲見洋一主催）、18 世紀フランス研究会（阿尾主催）などがルソー研究者の主な活動拠点（研究発表の機会）として機能している。

2. 近年の研究傾向

最初に断ったように、広範な学問分野に関わるルソーの著作は、当然ながら多様なアプローチによる研究が行われており、一般的な傾向を安易に導き出すことができない。それでも一つの流れのようなものがあるとすれば、「歴史（へ）の回帰」とでもいうべき現象が指摘されるだろうか。近年、「インテレクチュアル・ヒストリー」の視点が人文科学を席卷しているが、ルソー研

に、「Éditer Rousseau : histoire, problèmes, perspectives」という主題で編集された『年報』の 51 巻も参照 : *Annales de la société Jean-Jacques Rousseau*, t. 51, Genève, Droz, 2013.

⁷ 生誕 300 年にパリ第 7 大学とモンモランシーのルソー博物館でそれぞれ行われたシンポジウムの記録論文集も参照（題名はシンポジウムの主題と同じ）。*Rousseau et le spectacle*, sous la dir. de J. Berchtold, Ch. Martin et Y. Séité, Paris, Armand Colin, 2014 ; *Jean-Jacques Rousseau et les passions : colloque des 28 et 29 septembre 2012*, Paris, Mare et Martin, 2013. また、『孤独な散歩者の夢』「第二の散歩」中で語られるルソーと犬との衝突事故をテーマに行われたシンポジウムの論文集も最近出版された。*L'accident de Ménilmontant*, sous la dir. d'A. Vasak, Paris, Classiques Garnier, 2015.

同年に出版された学術論文集は文学関係に限っても多数に上る。前述「LIRE」のメンバーが中心になったものとして、*Jean-Jacques Rousseau en 2012 : puisqu'enfin mon nom doit vivre*, sous la dir. de M. O'Dea, Oxford, Voltaire Foundation, 2012 ; *Voix et mémoire : lectures de Rousseau*, sous la dir. de A.-M. Mercier-Faivre et M. O'Dea, Lyon, Presses Universitaires de Lyon, 2012。『新エロイズ』に関する論稿を数多く集めたものとしては、*Rousseau et le roman*, sous la dir. de C. Bournonville et C. Duflo, Paris, Classiques Garnier, 2012 ; *Sources et postérités de La Nouvelle Héloïse : le modèle de Julie*, sous la dir. de G. Goubier et S. Lojkine, Paris, Desjonquères, 2012。「自伝的著作」に関しては、日本の代表的なルソー研究者が複数参加した以下の論文集がある。*Les destinataires du moi : altérités de l'autobiographie*, sous la dir. de S. Kuwase, M. Masuda et J.-Ch. Sampieri, Dijon, Éditions Universitaires de Dijon, 2012. さらに『告白』についての論稿を集めた以下の文献も参照。*Lectures de Jean-Jacques Rousseau : Les Confessions I-VI*, sous la dir. de J. Berchtold, E. Lavezzi et Ch. Martin, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2012.

⁸ ジュネーヴの三つの会場（Bibliothèque de Genève、Fondation Martin Bodmer、Institut et Musée Voltaire）で行われた展覧会のカタログとして、*Vivant ou mort, il les inquiétera toujours : amis et ennemis de Rousseau (XVIII^e-XXI^e siècles)*, éd. par G. Ambrus et A. Grosrichard, Gollion, Infolio, 2012。さらに、それぞれパリの国民議会とパンテオンで行われた以下の展覧会のカタログを参照。*Rousseau et la Révolution*, Paris, Gallimard, 2012 ; *Jean-Jacques Rousseau et les arts*, sous la dir. de G. Scherf, Paris, Centre des monuments nationaux, 2012.

⁹ その成果は以下の論文集に結実している。『ルソーと近代 ルソーの回帰・ルソーへの回帰』（永見文雄・三浦信孝・川出良枝編）、風行社、2014 年。

究にも直接・間接にその影響が見られる。一例として、ルソーの思想と「科学史」との関係に新たな注目が集まっていることが挙げられるだろう。近年「最大の」研究書である Bruno Bernardi の博士論文 *La Fabrique des concepts*¹⁰は特に、プレイアド版『全集』に採録されず、これまでほとんど光を当てられることがなかった『化学教程 *Institutions chimiques*』をルソーの政治哲学と関係づけて話題となった¹¹。彼の研究が一躍注目されるようになったことと、ルソーと同時代の諸科学の関係性に注目が集まったことはほぼ同時的な現象であり¹²、Bernardi も編集に加わった 2000 年代初めの論文集 *Rousseau et les sciences* はこの「トレンド」を象徴的に表現している¹³。国内で最初にこの潮流の（本格的な）受容・導入を試みたのは、月曜社のウェブマガジンで『化学教程』の翻訳・注釈作業を進めている淵田仁・飯田賢穂であろう¹⁴。前述のようにこのテキストはプレイアド版『全集』に収められず、白水社の『ルソー全集』にも採録されていない。これまで未訳・未紹介であった著作を翻訳・解題する作業は、国内のルソー研究に新たな進展をもたらす可能性を有している。また、小林拓也の植物学に関する研究も、ルソーを広く「科学」的な地平から捉え直す視野に立っていると言えるだろう¹⁵。注目すべきは、小林が Champion 版『全集』第 11 巻（植物学関係の著作）の編集を一任されていることであり、国際的にも数少ない専門家として評価されている点である。さらに、Bernardi の «Groupe» に属しつつも、それとは独立して多数の単著を刊行している研究者に André Charrak がいる。思想史的な観点からルソーをデカルトやコンディヤックと関係づける視点は、同 «Groupe» の中で共有されている哲学史的関心とたしかに近いが、彼の独自性は、音楽論から出発して広く西洋思想史を描き出す企図の中で、ルソーの『音楽辞典』をその他の理論的著作と関係づけている点にある¹⁶。

これら同時代の諸科学との関係に注目する流れとはまた別に、ルソーの著作と当時の「公衆」との関係、歴史社会学的な関心とともに明らかにしようとする研究も顕著に見られる¹⁷。たとえば、アナール学派の流れを汲む歴史家 Antoine Lilti は「著名性 *célébrité*」を近代的な社会現象

¹⁰ B. Bernardi, *La Fabrique des concepts : recherche sur l'invention conceptuelle chez Rousseau*, Paris, Honoré Champion, 2006.

¹¹ Bernardi は『化学教程』の批評校訂版も作成している : J.-J. Rousseau, *Institutions chimiques*, éd. par B. Bensaude-Vincent et B. Bernardi, Paris, Fayard, 1999. その後、新たな批評校訂版が Champion 社からも出版された (J.-J. Rousseau, *Institutions chimiques*, éd. par Ch. Van Staen, Paris, Champion, 2010)。この成果は、同じく Van Staen が校訂を行った Champion 社版『全集』第 10 巻所収の『化学教程』に反映されている。

¹² ここで言う「科学」は「自然科学」に限定されない。たとえば前述 Bernardi の «Groupe» に属する C. Spector や B. Bachofen はルソーの著作と「経済学」との関係に関心を寄せている。さらに、「«Rousseau. Philosophie et économie»」と題された以下の特集号も参照。 *Cahiers d'Économie Politique*, n°53, Paris, Harmattan, 2007.

¹³ *Rousseau et les sciences*, sous la dir. de B. Bensaude-Vincent et B. Bernardi, Paris, Harmattan, 2003.

¹⁴ <http://getsuyosha.jp/rousseau/index.html>

¹⁵ 2012 年にヌーシャテル自然史博物館で行われた、ルソーと植物学関係の展示については以下のカタログ（学術的な論稿も含まれている）を参照。 *Rousseau botaniste : je vais devenir plante moi-même*, sous la dir. de C. Jacquier et T. Léchet, Fleurier, Bervédère, 2012.

¹⁶ A. Charrak, *Musique et philosophie à l'âge classique*, Paris, PUF, 1998 ; *Raison et perception : fonder l'harmonie au XVIII^e siècle*, Paris, Vrin, 2001 ; *Rousseau : de l'empirisme à l'expérience*, Paris, Vrin, 2013.

ルソーと音楽（特にオペラ）に関する国内の研究者としては内藤義博が第一人者として挙げられる。その充実したホームページ (<http://rousseau.web.fc2.com/>) と近著『ルソーとフランス・オペラ』（V2 ソリューション、2013 年）を参照のこと。

¹⁷ 日本語の著作としては特に水林章『公衆の誕生、文学の出現—ルソー的経験と現代』（みすず書房、2004 年）を参照。

とみなして、その起源を 18 世紀フランスに探りつつ、ルソーの著作を分析している¹⁸。文学の分野でルソーと同時代の読者との応答・共犯関係を論じた研究としては、越森彦の著作や Christine Hammann の著作が挙げられるだろう（いずれも近年提出された博士論文）¹⁹。また、スイス文学の観点からルソーの「特異な」作家像を論じた研究として、Jérôme Meizoz の一連の著作も挙げられる²⁰。以上の研究はいずれも、ルソーの自己表象とその「スペクタクル」性を新たな角度から分析しているが、同時に広い意味での « civilisation » とそのコード（の近代の変容）を巡る問題、あるいは「文化史」的な関心にも触れていると言える。

以上のような、ルソーを広い知的連関や同時代の諸科学と関係づける発想は、たとえば『対話』や『夢想』といった晩年の「自伝的作品」の解釈にも反映されており、そこで描かれる一見非合理的な「妄想」に作者個人の狂気や錯乱ではなく、（政治哲学・人間学的な）理論の先鋭化を見出そうとする傾向が見られる²¹。別の言い方をすれば、これまで合理性の欠如や矛盾を付与されてきたテキストが、「体系性」や「方法」の観点から再評価されるようになったということだが、それと並行して、特に Bernardi とその « Groupe » においては、「虚構」や「修辞」といった「文学的」要素をルソーの理論的著作に（性急に）認める解釈が注意深く遠ざけられている²²。この意味で、越や Hammann のようにルソーの「レトリック」や「文体」（と作家の自己表象との関係）に注目する文学研究は、一見すると近年の哲学研究から相対化されているように見える。しかしいずれの立場にしても、同時代の知的・社会的コンテクストを広く探索しつつ、ルソーのテキストに働く（ほとんど間主體的と呼べるような）「思考」を合理的・体系的に切り取ろうとしている点で、むしろ（ある程度まで）同様の発想を共有していると言えるだろう。

これに加えて、「批評理論」や「現代思想」におけるルソーへの関心についても言及するべきだろうか。ジャン・スタロビンスキー²³の著作に影響を受けつつ、たとえばミシェル・フーコー、

¹⁸ A. Lilti, *Figures publiques : l'invention de la célébrité 1750-1850*, Paris, Fayard, 2014.

¹⁹ M. Koshi, *Les images de soi chez Rousseau : l'autobiographie comme politique*, Paris, Classiques Garnier, 2011 ; Ch. Hammann, *Déplaire au public : le cas Rousseau*, Paris, Classiques Garnier, 2012.

²⁰ J. Meizoz, *Le Gueux philosophe (Jean-Jacques Rousseau)*, Lausanne, Antipodes, 2003 ; *Postures littéraires : mises en scène modernes de l'auteur*, Genève, Slatkine, 2007 ; *Postures littéraires II : la fabrique des singularités*, Genève, Slatkine, 2011.

²¹ その例として、J.-F. Perrin, *Politique du renonçant : le dernier Rousseau*, Paris, Kimé, 2011. また、「attention」の概念を通して（特に晩年の）自伝的作品とマルブランシュやコンディヤックの哲学を関係づけた以下の研究も参照。Y. Séité, « Attention et autobiographie chez Jean-Jacques Rousseau » dans *Les destinataires du moi*, op. cit., pp. 89-100.

²² この点に関しては、B. Bernardi と B. Bachofen が GF 版の『人間不平等起源論』に寄せた序文を参照のこと（J.-J. Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, présentation et notes par B. Bachofen et B. Bernardi, Paris, Flammarion, 2008, pp. 7-32）。実際、Bernardi は前述の博士論文 *La fabrique des concepts* において、ジャン・スタロビンスキー以外の文学研究者にほとんど言及していない（数少ない例外はルソーの「哲学」概念に関心を寄せた P. Hartmann, « Rousseau et la philosophie » in *La forme et le sens (II) : nouvelles études sur l'esthétique et la pensée des Lumières*, Strasbourg, Presses universitaires de Strasbourg, 2012, pp. 169-211）。たとえば、ルソーの思考の「方法」を同じく「包括的に」捉えようとした研究として、「逆説」（と修辞学・雄弁の伝統）というテーマから解釈を試みた M. Crogiez の著作（*Rousseau et le paradoxe*, Paris, H. Champion, 1997）が存在しているが、Bernardi の著作では取り上げられていない。また、『エミール』を「虚構」という側面から分析した L. Mall の著作（*Emile ou les figures de la fiction*, Oxford, Voltaire Foundation, 2002）に対しても同様に言及が控えられている。

²³ 生誕 300 年を機に、スタロビンスキーは過去に多様な媒体で発表した論稿を加筆修正した上で、一冊の論文集にまとめている。J. Starobinski, *Accuser et séduire : essais sur Jean-Jacques Rousseau*, Paris, Gallimard, 2012.

ジャック・デリダ、ポール・ド・マンといった思想家・批評家がこれまでにルソーのテキストに対する鋭利な分析を残してきたが、これらの仕事が必ずしも「学問的」なルソー研究と密接な関係を保っているわけではない。しかし、現代の「哲学者たち」によるルソーへの言及は近年も途絶えることなく、彼らの思索は狭義の「研究者」にとっても重要なインスピレーションの源となっている。その一例として、2010 年前後からルイ・アルチュセールのルソー論や講義録が改めて注目され、新たに出版されていることが特筆される²⁴。エティエンヌ・バリバルが、アルチュセールをはじめ上記の思想家たちに言及しつつ、『新エロイズ』を政治哲学的な（主体の）観点から分析しているのもこれと同じ時期である²⁵。同様に「研究者」というよりは「哲学者」の立場で『告白』を分析したアラン・ブロッサの *Le plébéen enragé* が挙げられるが、この主題はフーコーの思想への明示的な参照を含んでいる²⁶。また、セルジュ・マルジェルの著作は、「欺瞞」という周縁的なトピックに注目しつつ、ルソーの政治思想と文学との統合的解釈を新たに試みている²⁷。いずれも、専門的な研究から距離をとった自由な視点で（時に方法的なアナクロニズムも交えつつ）、ルソーの「古典的」な著作を「再文脈化」した仕事として捉えられるだろう。

日本の 18 世紀研究者が現代思想・哲学の成果を積極的に援用している例として、先述の阿尾を含めた、佐藤淳二、増田真、辻部大介による共同研究「フランス啓蒙思想における「法」の諸問題：物語・理論・表象の批判的研究」（2006-2007 年）が挙げられるが、そこではフーコー、デリダ、レヴィナスらの思想とルソーとの関係が探られている。日本語の著作としては、学術的な研究の「外」からルソーの現代性を再評価した東浩紀の『一般意志 2.0』が記憶に新しい²⁸。

3. 日本における近年の研究動向

前段の最後で日本の研究に話題が及んだので、今度は国内における研究状況をもう少し詳しく取り上げてみたい。2010 年には学術性の高い入門書『ルソーを学ぶ人のために』が出版され²⁹、現在の日本のルソー研究者が体現している多様な切り口が明らかになった。この入門書の執筆者で特に『言語起源論』を専門とする増田真は、生誕 300 年の機会に海外で最も精力的に研究発表を行った研究者の一人である。美学を専門とする馬場朗は、啓蒙期のピグマリオン主義やルソーの言語論に関心を寄せている。井上櫻子は、同時代の文学ジャンル「描写詩」や作家サン＝ランベールを視野に入れた研究を進め、2014 年にはフランスで『四季』の批評校訂版を上梓した³⁰。

²⁴ L. Althusser, *Sur le « Contrat Social »*, Houille, Manucius, 2008 ; *Le Cours sur Rousseau 1972*, éd. par Y. Vargas, Paris, Le Temps des Cerises, 2012.

²⁵ E. Balibar, *Citoyen sujet et autres essais d'anthropologie philosophique*, Paris, PUF, 2011.

²⁶ A. Brossat, *Le plébéen enragé : une contre-histoire de la modernité de Rousseau à Losey*, Neuvy-en-Champagne, Le passager clandestin, 2013.

²⁷ Serge Margel, *De l'imposture : Jean-Jacques Rousseau. Mensonge littéraire et fiction politique*, Paris, Galilée, 2007. また、近年出版されたその邦訳も参照。セルジュ・マルジェル『欺瞞について—ジャン＝ジャック・ルソー、文学の嘘と政治の虚構』（堀千秋訳）、水声社、2012 年。

²⁸ 東浩紀『一般意志 2.0 ルソー、フロイト、グーグル』、講談社、2011 年。

²⁹ 『ルソーを学ぶ人のために』（桑瀬章二郎編）、世界思想社、2010 年。

³⁰ Jean François de Saint-Lambert, *Les Saisons : poème*, éd. par S. Inoue, Paris, Société des textes français modernes, 2014.

もともと教育思想を専門とする坂倉裕治は、日本におけるルソーの受容史にも取り組んでいる³¹。「ベテラン」に属する上記の各氏に共通する研究傾向として、ルソーを論じる際に有効な「外部」ないし隣接の対象を取り込みながら、自身の専門領域を広げている点が特徴的である。

近年出版された主な研究成果としては、ルソーの政治思想とジュネーヴの政治制度との関連性を論じた川合清隆の著作³²、さらに、2012年に前述の国際シンポジウムを企画し、現在も研究会「ルソーと近代」を主催している永見文雄の浩瀚な著作が特筆される³³。その後の主要な研究としては、桑瀬章二郎が岩波書店の『思想』誌上に連載した論稿「〈嘘〉の思想家ルソー」が挙げられるだろう。永見・桑瀬両氏の仕事はいずれも、視点の多様化や主題の細分化が進んだルソー研究において、あえて総合的な読解を試みたものである。

これまでに言及されなかった若手研究者として、ルソーの道徳哲学を専門としている吉田修馬、ルソーにおける「野蛮」の問題に関心を寄せる福永洋介、ルソーとその実父との関係を調査している井関麻帆、『対話』の草稿研究をしている土橋友梨子、ルソーの著作のジュネーヴにおける受容を研究している橋詰かすみなどが、今後を支えていく世代として挙げられるだろう。以上は、博士課程以上のルソー研究者を筆者の狭い見識に基づいて紹介したものだが、その外にもルソー研究の広大な裾野が広がっていることは疑いを容れない。

結びにかえて-隣接的な作家研究への期待

2012、2013年には、ルソーとディドロの生誕300年を記念するイベントが多数開催されたが、フランスで行われたいくつかのシンポジウム・コロックに参加して筆者が特に印象を受けたのは、ルソー研究者とディドロ研究者の間にある種の因縁に近い強固な連帯感、ないし協働（共闘）関係が存在するように見えたことである。自分の専門で手一杯という「言い訳」が許される環境からやってくると、ディドロ研究者が当たり前のようにルソー・シンポジウムで発表し、あるいはルソー研究者がディドロ・シンポジウムで司会するという光景は夢のようであり、「本場」の研究の底力をまだまだ感じさせるものであった。専門の「交換」による魅力的な競演は、たとえば、ディドロ研究者がルソーを論じ、ルソー研究者がディドロを論じた Desjonquères 社の論文集 *Diderot-Rousseau* においても実現されている³⁴。この論集に寄稿している前述の Jacques Berchtold が予告しているところによると、彼と Yannick Séité（いずれも専門はルソー）は、ディドロ『運命論者ジャックとその主人』にルソーに特化した注のみを付して出版することを企画しているらしい³⁵。このように、専門領域の「限界」を逆に生かした仕事の実現されれば、今後のルソー研究ならびに18世紀フランス文学研究に新たな方向性が示されるかもしれない。様々な「政治的現実」をあえて無視した上で、さらに単純化の誇りを恐れず、以下のような「逆説」を口にして

³¹ ルソーの教育思想と文学に関する近年の研究成果として以下の著作が挙げられる。Ch. Martin, « Éducatons négatives » : *fiction d'expérimentation pédagogique au dix-huitième siècle*, Paris, Classiques Garnier, 2010 ; *Éduquer selon la nature : seize études sur Émile de Rousseau*, sous la dir. de C. Habib, Paris, Desjonquères, 2012.

³² 川合清隆『ルソーとジュネーヴ共和国 人民主権論の成立』、名古屋大学出版会、2007年。

³³ 永見文雄『ジャン=ジャック・ルソー 自己充足の哲学』、勁草書房、2012年。

³⁴ *Diderot-Rousseau : un entretien à distance*, sous la dir. de F. Salaün, Paris, Desjonquères, 2006.

³⁵ *Ibid.*, p. 140.

みたくもなる。もし、日本国内における二人の作家の生誕 300 年が期待されていたより「貧しい」結果に終わったのだとすれば、それは、2012 年にディドロ研究者に十分な「場所＝席」が与えられず、2013 年にはルソー研究者が「不在」だったことに原因があるのではないかと。「*« frères ennemis »*」と形容されるルソーとディドロの特権的・例外的な二者関係を、額面通りに肯定することに関しては是非が分かれるに違いない。しかし、今後の発展が（内からの充実はもちろんのこと）、外（＝隣接的な作家の研究）からの貢献にも多分に依存せざるをえないという意味で、ルソー研究とディドロ研究は文字通り「運命」を共有していると言えるのではないだろうか。

（パリ第 7 大学博士課程）